

ダブリンと小ダブリン

——文学者と幽霊の街——

高橋 哲雄

文学館都市ダブリン

博物館に見立てて都市を語るうと思いつたときの構想にはありながら、本シリーズからいったん外した都市が一つある。ダブリンである。

博物館の重要なジャンルの一つに文学館があり、そしてヨーロッパの「文学館都市」といえば、ロンドン、パリ、あるいはヴェネツィアといったメガ国際文化都市を除くと、まず指を折るべきはダブリンであろう。ここが一九世紀末から二〇世紀初めだけでもいかに文学者との縁が深かったかについては、たとえばリチャード・エルマンの評伝エッセイ『ダブリンの4人 ワイルド、イエイツ、ジョイス、そしてベケット』（大沢正佳訳、岩波書店）をみればよくわかる。それにシンギャショー、少しさかのぼってパークと、もちろん『ガリヴァー』の

スウィフトを加えねばならない。このうちショー、イエイツ、ベケット、それに現代詩人シェイマス・ヒーニーの四人はノーベル賞作家だが、ジョイスの影響力は彼らに劣るまい。

この強みは文学者を、文字通り「生んだ」ところにある。前記の巨星たちのうちヒーニーを除く全員がダブリンかその郊外の生まれというのは驚嘆にあたいする。ヴェネツィアは文人を誘い寄せたが、けっして生みはしなかった。

ダブリンは彼らの作品の中で不朽のものとなった。とりわけジョイス。自分の作品を読めば、かりにダブリンが消滅しても、そっくり再建できるだろうと自認するほど描き込んでいる。彼らがそれぞれに語ったダブリンに外来観察者の見たダブリン像を加えたいへんな数になる。最近川本三郎の好訳で本になったアメリカのSF作家レ

イ・ブラッドベリの、アイルランド出身の映画監督ジョン・ヒューストンとの交情を描いた『緑の影、白い鯨』（筑摩書房）を挙げるにどうめよう。

ところが文学館都市としてのダブリンにはもうひとつ注目すべき事実がある。この文学的天才たちがここを死場所には選ばなかったことだ。一七四五年にスウィフトが没して以来、ダブリン生まれの偉大な文人でダブリンで死んだ人はいない。ワイルド、ベケットはパリ、イェイツは南仏、ジョイスはチューリッヒ、シヨール、パークはイングリランドでなくなった。スウィフトだってここで死にたかつたわけではない。ダブリンは文学者の居着かない町である。この「文学館都市」に看板をかけるのであれば「もっとも高い比率で亡命文学者を生んだ都市」となるうか。逆説的だが、才能ある人が長居するところではないということだけが才能を育てたのかもしれない。

私はアイルランドに打ち込んだ時期があり、ダブリンにも愛着があって、いくどか足を運んだ。美しい都市が妍を競い合うヨーロッパのなかでジョイスが「なつかしの薄汚れたダブリン」と呼んだ、もひとつばつとしない、どこか田舎くさいこの街のどこが天才を懐胎させ、しかし居つかせなかったのかという、簡単には答えが出そうもない問題がいつも頭の隅にあった。それもあって、二〇〇五年の夏に久しぶりにダブリンを訪ねようとしたら、出発の前日に狭心症の発作を起こし行けなくなった。以来、毎年のように再訪を期したのだが、旅仲間

である妻を亡くしたり、私自身も次々と故障に悩まされて、ダブリンの街歩きができるような状態でなくなった。こたわりというほどのものではないが、私は何度行つたところでもテーマによっては「眼鏡」を取り替えて見直しの旅をすることになっている。その都市の現在の空気を吸つたうえでないと書けないのである。そんなわけで、ダブリンはあきらめようと思つた。

アメリカの「ダブリン」たち

ところがそうしたある日、その「眼鏡」をちよつとずらしたら、ちがつた趣のダブリン像が浮かんでくるかもしれない、と思つようになる。そのきっかけは『ダブリンUSA』（茂木健訳、東京創元社）というつぶう変わった旅行記であつた。

ジョセフ・オコーナーという若いアイルランドの作家の手になる、アイルランド移民が残した足跡を求めてのアメリカ周遊記なのだが、そのさい彼はボストン、ニューヨークといったアイリッシュに縁の深い土地とは別に、ダブリンという名のついた九つの町を回ろうとしたのである。彼には少年時代にダブリンのセント・パトリック・デイのパレードで眼にした、「テキサス州ダブリン」や「オハイオ州ダブリン」から来た少女たちが投げキスをしながら高く脚を蹴り上げて練り歩く姿が焼きついていて、以来アメリカのダブリンたちは彼のあこがれとなる。アイルランド人移民はアメリカ全土で祖国の何倍もの人口にのぼり、すばらしいダブリンがいくつもあっておかしくないはずであつ

た。

しかし、彼の想いはあつけなく裏切られる。彼が訪ねた新大陸のダブリンはどの町をとつても本家ダブリンとは似ても似つかぬ代物であった。なぜダブリンと名づけられたかもわからない西部劇の書割のよくな町、宿屋が二軒くつついた「ダブル・イン」がつづまってダブリンと呼ばれるようになったという、アイルランドと何の縁もない町、最初の測量をおこなった技師がアイルランド人だったというだけの町、アイリッシュの入植から始まったものの今ではワスプの高級住宅街になった町といった具合で、ついにはパブ天国ダブリンを知る者は苦笑を誘うだろう、一軒のパブもない禁酒主義の町までが現れる始末。

この皮肉な「発見」は私を考え込ませた。あのアメリカにして「小ダブリン」、あるいは「第二のダブリン」が存在しないのだとすれば、ではどこに行ったらめぐり合えるのだろう。どういう町が小ダブリンたりうるのだろうか。その条件の大きな部分は——と私は考えた——やはり「文学館都市」でなければならぬ。平凡なことをいうようだが、文学や歴史がそこにはなければならぬ。残念ながら新大陸のダブリンたちにはそれが決定的に欠けていたのである。逆にそついう条件を具えた町があれば、そこからダブリンをダブリンたらしめていく何かが見えてくるかもしれない。

『ユリシイズ』と「幽鬼の街」

そこでさらにひとつ思い起こす。私はダブリンを文学館に見立てようとしていながら、七十年前の日本で自分の郷里の町をダブリンに見立てて、そこを舞台にジョイスの『ユリシイズ』の手法で小説を書くという、なかなか思い切ったというか、実験的な企てを実行に移した作家がいたことを忘れていた、そのことをオコーナーの本を読んでいて思い出したのである。ここにこそ小ダブリンがあるのでないかと。小説の題名は「幽鬼の街」で、モデルの都市は北海道の小樽、作家は伊藤整である。一九三七年のことであった（『ユリシイズ』は一九二二年刊行だから、一五年しか経っていない）。

なぜ伊藤はそんなことを試みたのか。彼の生き方をジョイスに重ね、彼が青春を生きた小樽をダブリンに重ねあわせる、つまり小ジョイスから大ジョイスを、小ダブリンから本ダブリンを照らし出すというやりかたで、ダブリンという街のある側面に光を当てることができないうだろうか。いいかえると、伊藤整にとつての小樽を、ジョイスにとつてのダブリンに重ね合わせることで、すくなくとも「ジョイス文学館」ダブリンのある部分が見えてくるのではないかと、まあそう期待したのである。

「幽鬼の街」は伊藤整の初期の代表作だが、よく知られた作品とはいえない。背景を含めそのあらましを紹介しておこう。

伊藤整（一九〇五—一九六九）は小樽の郊外で生まれ、地元の中学校、

高等商業学校を出たのち、土地の中学校で教鞭をとりながら詩を書いていたが、やがて東京に出て小説、評論で身を立てることになる。この中編小説は、久しぶりに帰郷した作者とおぼしい人物が、街のそこで幾人かの小樽時代の友人や恋人たちの幽霊（存命の人を含む）と出会うという幻想的な色合いのなかに若き日への苦い悔恨の想いをにじませたもので、彼はそこに高商での一年上の後の小説家小林多喜二や彼らの教師であった異色の経済学者大熊信行を、自分が冷酷に捨てた少女たちとともに幽鬼として登場させている。

当時伊藤はジョイスに打ち込んでいて『ユリシーズ』の翻訳を三年越しに完成させたところだった。「幽鬼の街」はそのつよい影響の下に書かれたとされる。『ユリシーズ』の主人公である、しがたない新聞の広告取りレオポルド・ブルームは、一九〇四年六月一六日、ダブリンの街を、古代神話のオデュッセウスさながらにさまよう。酒場で「巨人」「市民」に会い、新聞社で「風の神」に編集長に追い返され、食堂で「魔女」に娼婦の声に誘惑される。売春街では亡くなった息子の幽霊が現れ、もうひとりの主人公であるステイーヴン・ディーダラスには、娼婦が母の亡霊の姿になって改悛を求めるといったふうに。

「幽鬼の街」の趣向はそれをそのまま踏襲している。伊藤自身、文中で「ここはおなじみの妙見河畔だぜ。君はまるでリッフィー河畔のレオポルド・ブルームといったようないふかい顔をしているんじゃないか？」と川の音に語らせる。

もつとも伊藤はたいへんな読書家であって、ジョイスばかりを読みふけていたわけではない。「幽鬼の街」にはディケンズの影響もみられる。小林多喜二の幽霊が語り手「私」の体をつかんで空中を飛ぶシーンは『クリスマス・キャロル』の主人公スクルージの幻想的な体験そっくりだし、これはディケンズの権威である松村昌家から教えられたのだが、小樽の古着屋街で着古した衣服の形をした幽霊の群が「私」に襲いかかる場面は『ボブのスケッチ集』中の「マンモス街の瞑想」からとったものらしい。しかし、それはあくまでも部分的な場面の借用なのであって、伊藤整が吝嗇な金貸しであるスクルージにはもちろん、作者ディケンズにもみずからを投影させているとは考えにくい。

ジョイスと伊藤整——「不気味なぐらいの相似」

それにはたいしてジョイスと伊藤の間には、生まれ育った土地とのつながりも含めて「不気味なぐらいの相似」（桶谷秀昭『伊藤整』新潮社）が見られる。

ジョイスはダブリン近郊の収税吏の息子で、十人という子沢山の長子に生まれた。九歳のとき父が失業、酒びたりになってやがて財産をすべて失う。伊藤も十二人の子沢山の二人目の長男に生まれ、父は退役軍人で小樽近郊の村役場の書記であったが、第一次大戦時のインフレーションによって恩給が目減りしたことから運送業に手を出して失敗、多額の借金を抱える。伊藤は北大予科から医学部に進んで医師になり、傍



堀内規次画『伊藤整肖像』©堀内和子

ら文学をやりたいという希望を持っていたが、その道は家計の破綻によって断たれ、地元の小樽高商に進む。

この学校は仙台以北に文系の大学がなかったこともあり、北海道内では唯一の国立の文系高等教育機関であったことから、広く俊秀が集まった。教師たちも若く熱気に溢れ、自伝的な『若い詩人の肖像』——このタイトル自体がすでにジョイスの『若い芸術家の肖像』といかに似ていることか——に出てくる大熊信行や小林多喜二の場面はいきいきとしていて、だのに大熊とも、大熊に近かった小林多喜二とも親しくはならなかった。「宗教的な人間に危険なものを感じ」たと、のちに彼はいう。それでいて二人を『肖像』でも「幽鬼の街」でも実際の付き合い以上に大きく登場させているのは、当時広く知識人の心をとらえていたマルキシズムが気になる存在だったのだらう。「臆病で」

それに近づけなかった伊藤は、小林にたいしては、築地警察署での拷問による殉教といってよい死に方もふくめて、ある後ろめたさを感じたのかもしれない。「幽鬼」のなかにはマルクスらしい姿も登場するし、大熊は彼の出世作でありマルクス経済学への一つの回答である『マルクスのロビンソン物語』を手にして登場する。

ジョイスも医者になろうとした時期があったが、うまく行かなかった。彼はアイルランドでは被支配階級であるカトリックの出であったため、ダブリンのエリート校トリニティ・コレッジに進まず、二番手のユニヴァーシティ・コレッジへ行き、近代語を学ぶ。伊藤におけるマルキシズムはジョイスではナシヨナリズムであったらうが、独立運動やアイルランド文芸復興の主張に心を動かされたものの、芸術派の砦にこもって運動に加わらなかった。ジョージ・克蘭シーというフェニアン（行動派民族主義者）のちにリメリック市長になり、英警察隊に殺された友人がいたことも、小林を殺された伊藤と似ているといえは似ている。

ジョイスは十四歳のときから売春婦と性体験をもつようになり、イエズス会の学校に通っていたこともあって、烈しい罪悪感に悩まされた。伊藤は高商時代に自分に好意を寄せた女学生と性交渉をもつたのち、冷酷に捨てたといつてよい別れ方をした。だのに衝動的に関係を蒸し返そうとして断られ、傷つく。以来、彼らの文学的生涯は「性」と重要なかわりをもちながら営まれてゆくことになる。わいせつ裁判の被告になる経験も共有し、ともに正面から立ち向かってゆずらな

った。

ジョイスは二十二歳でダブリンを離れてヨーロッパに向い、三度の短い帰国を除いて再び帰ることがなかったが、彼が書き続けた小説の舞台は常にダブリンであった。トリエステで完成した『ダブリンの市民』、『若い芸術家の肖像』、『チューリッヒでの『ユリシーズ』』、そしてパリでの『フィネガンス・ウエイク』と、どれもそうである。伊藤も二十三歳で東京に出てから、長期にわたって戻ることにはなかった（第二次大戦中に疎開で妻の郷里に一年生活を移したことはある）のに、「幽鬼の街」や『若い詩人の肖像』のほかにも、小樽を舞台にいくつもの自伝的小説を書いた。彼らはまた、外国にあっても「内地」（本土）にいても、同郷の家族、友人との結びつきがよかった。彼らのどちらにとっても郷里は特別の意味を持っていたかに見える。

ダブリンと小樽―没落旧家と日の出の商家

さて二つの作品の舞台になったダブリンと小樽であるが、これはジョイスと伊藤の経歴のように「不気味なくらいの相似」を見せるといふわけには行かなかった。似ている点も似ていない点もあるが、似ていないところの方がずっと多いようだ。

まず都市としての歴史、伝統の圧倒的なちがいがあある。

ダブリンは古い歴史のある町で、控えめに見ても中世初期のヴァイキングの交易地から出発した、ジョイスがいうところの「キリスト教世界で七番目に古い」「千年の都」である。近世以来やむなくその版

図に組み込まれたイギリス帝国のなかでもロンドンに次ぐ「第二の都市」であった。文化的にも無視できぬ存在で、一八世紀後半のダブリンの出版点数はエディンバラのそれを上回った――海賊版が多かったけれど。

ところが一九世紀はじめに議会在イギリスに併呑され、完全植民地と成り果ててからは経済的にも長い停滞に落ち込み、プロテスタントとイギリスの二重支配の下に世紀末にはダブリンのカトリック系市民は無気力な日々を送っていた。希望の星であった自治運動の指導者パネルが教会の煽動と民衆の裏切りにあつて失脚した事件も閉塞感をつよめた。当時九歳のジョイスは事件にショックを受け、のち『ダブリン市民』の冒頭で、彼らを支配した無気力症状を「麻痺」と呼ぶ。この街に未来はないかにもえた。彼が故郷を捨てて亡命生活に入ったのは、この時代の知識人としてはとくに変わった選択ではなかった。

かたや小樽は新興都市である。もともとニシン漁港であり、綿花肥料としてのニシン粕移出の北前船航路の起点だった。明治元年の人口は二千余りにすぎなかったが、やがて開拓移民や屯田兵受け入れの玄関口となり、ほどなく石炭の移出港となり、札幌との間に日本で3番目に早い鉄道も敷設された。日露戦争後、樺太や沿海州との交易が大きく成長した。

石川啄木が「小樽日報」の記者として小樽に着いたのは一九〇七年のことで、彼は「小樽は忙しき市なり」といい、「小樽に来て初めて真に新聞地的な、真に植民地精神に溢るる男らしい活動を見た、男ら

しい活動が風を起す。その風が即ち自由の空気である」と書く。『「握の砂」集中の一首』かなしきは 小樽の町よ 歌ふこと なき人びとの 声の荒さよ」は当時の小樽のギラギラと活気に溢れた、しかし殺風景な町の空気を伝えている。

今日観光の目玉になっている運河は港湾改造のためもつとあとにつくられたもので、一九一四年に着工されている。以後、街の発展は加速し、その六年後には日銀をはじめ、実に二十一の銀行が小樽で開業し、「北のウォール街」と呼ばれる商業・金融中心地を形成するまでになる。

大正末期の小樽を伊藤整や小林多喜二、小熊秀雄らを生んだ三二文学館都市にしたのは一つにはこの富の集積である。富はゆとりを生み、それが、市民の多様な文化活動を盛んにした。同時に格差をつくり、先鋭な問題意識をかきたてもする。なかでもきわだった意義を持ったのは文化の核として小樽高商ができたことであろう。それについては後述する。

右のとおり、ダブリンが没落した旧家のような都市であるのにたいして、小樽は日の出の勢いの商家のような都市で、まったく対照的。比べようもない。「小ダブリン」もへったくれもあつたものではないはずだった。しかし、「没落した旧家」といつても旦那もいれば使用人もいるわけで、ジョイスらカトリック系の多数市民はその使用人に当る。彼らは旦那衆とは反発しあいながらも、旧家意識や文化、プラ

イドは往々にして共有した。ジョイスが作品を作り出すさい、西洋文学の古典を自在に行使することができたのはその恩沢による。ついにながら旦那衆の文学がアングロ・アイリッシュ文学で、これは多数の傑作を生み出した。

逆に「日の出の勢いの商家」でもついて行けなくて弾きだされる層は必ずあるもので、伊藤整の父はそれに当る。そこには蓄積された文化や伝統が存在しないから、伊藤整がしたようにあたらしい思考、方法にアンテナを立てるしかない。これは二人の文学への態度にみられる重要な違いといわなければならないだろう。

ダブリンと小樽—相似点？

他方、二つの都市の似たところについてはどうだろう。

ダブリンはイギリスの植民地アイルランドの首都であり、小樽は開拓植民地北海道の主要な都市、大正時代には最大の都市であった——と、そういう括られ方をすることがある。しかし「植民地」という言葉が共通だといつても、内容はまったくちがう。伊藤整は津軽海峡を越えると、言葉も自然も、街並みも「外国」のように感じ、引け目を感じたと強調しているが、そういう軽い文化ショックに似た意識は、ダブリンの大多数の住民のなかから生まれた知識人とイギリスの間に存在する巨大な政治的・宗教的な隔たりや敵意のまえでは比べものにならない。じつさい伊藤は京都の文化的洗練にたいしてはしきりに劣等感を口にしたが、支配の頂点である東京にたいしてはなにひとつその種

のことを語っていないのである。対するにジョイスはロンドンに亡命しようとはしない。それでは亡命にならない。それは、だから相似点とはいえない。

二人を育てた教育はどうだろう。

ダブリンも小樽もそれぞれにおかれた地位や都市規模からすればりっぱな高等教育機関にめぐまれた。ジョイスと伊藤のそれぞれの青年期の両都市の人口がほとんどかわらなかつたことはあまり知られていない。伊藤の高商時代に当る大正末に小樽の人口は札幌に追い越されるが、それでも一三万はあり、対するに一九世紀後半停滞をつづけたダブリンの人口は世紀末にはベルファストに抜かれ、新世紀に入っても一五万（拡大される前の市域で）に留まった——ダブリンの過去の栄光を思えば、いかに停滞がつづいたとはいえ、ダブリンが小樽なみのサイズの小さな都市になっていたとは意外であった。

その小樽の最高学府である小樽高商は日本で五番目の官立高等商業学校——東京、神戸、山口、長崎に次ぐ——として一九一〇年に設立された。東京以北最初の高商ということ、仙台、青森、函館も名乗りを上げたが、小樽区（当時）はその富にものをいわせて、一万二千坪の校地と二〇万円の寄付（当時小樽区の年間予算は三〇万円）という破格の条件を用意して誘致に成功したのである。

小樽高商の役割

一九二二年入学の伊藤整は『若い詩人の肖像』で、ここを「官立の

専門学校としては「二流」と書いているが、そうではあるまい。北大は第二次大戦後の学制改革まで文系学部を持たなかつたし、また仙台以北に官立高等学校ができるのがおくれた（弘前高校、山形高校はともに一九二〇年設立）こともあって、小樽の人気は高く、優秀な生徒が集まった。北海道出身者は三分の一で、残りは全国から集まったといわれる。

教官の方も若い清新な人材が集まった。生徒を「紳士として遇する」というリベラルな校風の下、経済学者でも大西猪之介や大熊信行といった、哲学、文学に深い理解のあるすぐれた少壮学者を迎えた。大西は『囚はれたる経済学』という世評の高い本を残して、伊藤整入学の前年、三四歳で世を去っていたが、彼の尽力で図書館にも西欧の文芸書が多く入れられ（大西は四年半も留学させてもらっていた）、伊藤はそこでエイツやデ・ラ・メア、シモンズの詩集を英語で読んだ。一年上の小林多喜二もよく図書館に顔を出し、伊藤は日本の文芸書ではどの本も、自分が借り出す前に、多喜二に読まれて中味が抜き取られているような気がしたと書いている。

「小樽外国語学校」と呼ばれるほど英語の時間が多く、ほかの学科も英語の教科書が使われることがあり、外人教師の多くは英語で授業をおこなった。ほかの高商が通常二人しか置かなかつた外人教官を常に五―六人は抱えていた。テキストは文学書中心で、伊藤が可愛がられた英語担当の小林象三の授業ではシングのアイランド劇が、浜林生之助の授業はステイーヴンスンの『旅は驢馬を連れて』を使つとい



オConnell通りのジョイス像
アイルランド政府観光庁提供

ったふうで、「実用英語」の時間にハーデイの小説が使われたこともあつたらしい。これはもう旧制高等学校とあまりかわらない。伊藤整が短時間のうちにジョイスを読みこなすだけの英語と文学的素養を身につけた基礎はここで培われたと思われる。

二人の故郷脱出

伊藤整がジョイスを知ったのはおそらく高商を卒業した四年後の一九二九年、雑誌『改造』に土居光知が『ユリシーズ』を紹介したのを読んだことであつただろう（彼自身は『ジョイス研究』の序文でそう語っている）。あるいはもっと早く芥川龍之介が注目した『若い芸術家の肖像』によつてであるかもしれない。どちらにせよ、一九三〇年にはジョイスの方法に拠る新心理主義的文学論の第一弾の論説と「意

識の流れ」を使った小説を発表するとともに、『ユリシーズ』の翻訳に着手している。永松定と辻野久憲とのこの共訳は一九三一年に前編が、三三年には後編が完成している。この原著は一九二二年にパリで刊行されているが、わいせつ文書の疑いで英語圏国では一九三四年（米）、一九三六年（英）まで刊行されなかったことを考えると、この早さは瞠目に値しよう。

それにしてもなぜジョイスなのか。伶俐な青年であつた整は自分のそれまでの詩作の世界が時代遅れの抒情詩で展望がないことを知っていた。しかも裕福でない彼は道楽で文学をやることはゆるされなかつた。さらに、上京した彼は自分が日本文学の伝統から切り離された「外地」育ちの、孤立した存在であることを意識せざるをえず、その意味からも自らの資質に、あるいは北海道の風土にふさわしい、新しい知的な文学の思想や方法を模索していた。彼の周辺にも外国文学に詳しい、そうした仲間がいて、『ユリシーズ』の翻訳は淀野隆三に勧められたらしい。親友の妹で詩人の左川ちかのように、妻も入り込めない、戦友であり恋人であるといった存在もいて、ジョイスの詩を読むことで結びついていたりした。もっといえば『ユリシーズ』と前後してゴーマンのジョイス伝を読んでいた彼はジョイスの生涯から、とくに、やはりみだしものであつたジョイスが古典を利用して斬新な作品を生み出した姿勢に共感を覚えたのかもしれない。いずれにしてもジョイスは整の「故郷脱出」にとつて跳躍台の役割を果たしてくれたのである。

ジョイス自身はどうだったか。ダブリンにはプロテスタントのトリニティとカトリックのユニヴァーシティの両コレッジがあって、それぞれに高い教育水準を誇っていた。とくに後者は植民地としては異例とあってよい充実ぶりであった。

彼の入ったユニヴァーシティ・コレッジはカトリック・エリートの大卒だったが、カトリックの社会的地位のゆえにそこを卒業しても碌な就職先は得られなかった。彼の出世した友人たちがそうであったように、医師や弁護士、あるいは聖職者の資格をとるか、政治の道に進んで国会議員や市長になるといった「実学的」なコースをとるしかなかった。当時勢いのあつた民族主義とも文芸復興運動とも同調しなかった。当時曲がりのジョイスが政治、文学で志を得ることはむづかしかつた。彼は近代語を学んだのち、医学を修めようとして果たせなかったのだが、結局その語学が役立つたのは伊藤に似ている。ノルウェイ語でイプセンを読み、ロンドンの有名誌にその劇について論文を書いたことがまだ学生である彼を有名人にしたし、イタリア語は一〇年に及ぶトリエステ生活を快適にした。それ以上に近代語の学位は長い亡命生活で語学教師として家族を養い執筆を続けるのを助けてくれたのである。しかし、何にもましてそれが「二〇世紀最大の言葉の魔術師」の誕生に力を貸したことは疑いない。

ダブリンの幽霊たち

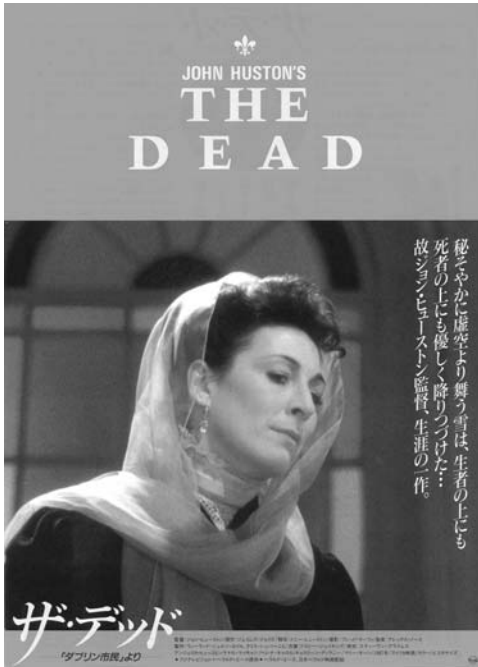
ジョイスと伊藤整の二人はともに故郷を捨てた。しかし捨てた故郷

を生かさねば自分の文学を創造することはできなかった。その意味では故郷とつながっていた。故郷は過去を意味するが、生かしたい過去と忘れたい過去があつた。忘れたい過去が追いかけてくるとき、それは、たとえば幽霊のかたちをとる。「幽霊の街」の幽霊たちも『ユリシイズ』のそれもそうだ。しかし、追いかけてくる過去のすべてが忘れ去りたい過去ではない。

ジョイスのばあい、死者はわれわれの想像以上に親しい存在であつたようだ。『ダブリンの市民』中の名篇「死者たち」のラストでは、死者たちがじつはごく近くについて、生者たちをみつめ、耳を傾け、そのある者とは交信しているというのが重要なメッセージである。ヒロインであるグレタの死んだ恋人フュアリーはガス灯の光となつて停電中のホテルの彼女夫妻の部屋の窓に差し込んでいる（フュアリーはガス工場で働いていた）、といった私には興味深い読みも最近現れた。グレタは気付いたようだが、夫は気付かない。

幽霊が出没するのはジョイスに限つたことではない。アイルランドは妖精の国で、ダブリンはその首都だから妖精の生息状況はどうかと思つたが、街には妖精はなじまないのか、聞かれるのはもっぱら幽霊話である。怪奇作家レ・ファニユの蒐集したダブリンの二巻本の幽霊談には物語・伝承と実見録がぎっしり詰め込まれている。

アイルランドのもつとも有名な俗謡「モリー・マローン」は世界中のアイリッシュ・パブで唄われたり、ラグビーの国際試合で応援歌になつたりで、この国の国歌だとも非公式のダブリン市歌ともいわれる。



『ザ・デッド』宣伝用チラシ

一八八九年にはダブリン千年祭の機会に目抜きグラフトン通りに記念像が建てられたりもした。実在の魚売りの美人姐ちゃんを詠ったともいわれるこの曲の第三連には熱病で死んだ彼女の幽霊が出てくる。第一連と第三連を訳してみる。

うるわしのダブリンの街で

きれいな娘たちのなか

まず眼についたは別嬪さんのモリー・マローン

手押し車をガラガラと

広い道狭い路通りぬけ

声張りあげて「鳥貝にムール貝、生きてるよ」

秘そやかに虚空より舞う雪は、生者の上にも死者の上にも優しく降りつけた。
故シモン・キュースト監督、生涯の作。



モリー・マローン像

彼女は熱病で死んだ
だれも救えなかった
それが別嬪さんモリー・マローンの最期さ
いまでは彼女の幽霊が手押し車をガラガラと
広い道狭い路通りぬけ
声張りあげて「鳥貝にムール貝、生きてるよ」

モリーは夜はパートの娼婦をやっている、トリニティ・コレッジの学生に人気があったそうで、それが幽霊として残るまでに惜しまれた原因であるかもしれない。貝はむろん性的暗喩、それにしても国民的

愛唱歌に堂々と娼婦の幽霊が登場するとは何というお国振りであることか。

彼女の往き来した通りは、現在夏には二つ催行されているゴースト・ツアの必訪ポイントでもあるらしい。私はロンドンのことを——世界に冠たる怪奇都市であり、幽霊ズレしていて、幽霊が出るという噂のある家のほうが高い売値がつくというロンドンを——思い出さざるをえなかった。ダブリンは幽霊にかけては、ロンドンには及びもつかぬとしても、旧帝国「第二の都市」ではあるのだなと。そして、そうした空気が『ユリシイズ』の場面にも入り込んだのだろうか。

小樽映画は幽霊が好き

ところで私が小樽をダブリンになぞらえたのは「幽鬼の街」を『ユリシイズ』と重ね合わせることによってであった。二つのゴースト・ストーリーで二つの街をつないだのである。

けれども、「幽鬼の街」に舞台を提供したからといって、小樽を勝手に幽霊の街に仕立てるわけにはいくまい。なるほどここには働く人の哀歎がしみついた、曰くありそうな倉庫群や暗い水をたたえた運河、港のすぐ近くにこんもり盛り上がった水天宮の丘、またかつては街裏のそこそこに小暗い影をつくっていた私娼窟、といった幽霊の出てきそうな道具立てがそろっている。この街の市立文学館から出た資料を見ると「幽鬼の街」のあとを實際にたどることも、ごく一部の不明箇所を除いて可能らしい。

けれど、この街の特徴はなによりも海にむかって解放された坂の多い港町であり、学生町であるところにあつて、それにふさわしいちょっとハイカラで風が吹き渡るような気分を身上とする。長崎、神戸、尾道といった街に似ているのである。明治末頃からの石造・木造の近代建築がよく残っていて街の表情に風格を与えていること、古風な喫茶店が多いことでは、これらの街を越えているかもしれない。ヨーロッパでいえばダブリンよりもトリエステといったところか。

そんなわけだから、似合いそうもない幽霊を持ってきて話を締めくくるつもりはなかった。ところが、小樽関係の資料、とくに映画を観ているうちに、意外なことに、この街を舞台にした映画には幽霊がよく現れることに気付いたのである。

代表的な小樽映画といってよい大林宣彦監督の「はるかノスタルジイ」がそうだ。原作は小樽出身の山中恒。

東京の中年ライター綾瀬は、相棒の挿絵画家が死んだのを機にふと思いついて、少年期を過ごした小樽を訪ねる。ひよんなことからかつての恋人遥子とそっくりの少女はるかとの出会い、ガイド役を頼む。彼らの行く先々に出没し、綾瀬の本名を名乗るふしぎな少年が、彼の封印した青春の記憶の再生を助ける。それはなんともおぞましいものであった。

高校生であった綾瀬は、貧乏作家の父が酒におぼれ、義母は身を売って生計を助け、ある夜争ううちに父を殺したと錯覚して、もともと好きだった綾瀬に交情を迫るといった絶望的な境遇にあった。家を

飛び出した少年綾瀬は公園の暗がりて少女遥子と知り合って惹かれ合うようになる。互いに名も住所も知らせぬ約束だったが、偶然彼女が娼家の娘であることを知る。娼婦と誤解した彼は、町を出る彼に最後に処女をささげようとした遥子を娼婦扱いし、罵って別れる。その後立ち直った遥子は別人と結ばれて一子をもうける——それがはるかだった。やがて遥子は死んで、親友がはるかを育ててきた。

不思議な少年は綾瀬の分身であり、封印された過去の亡霊というわけ、過去との和解を取り持つためにはるかと連れ立って綾瀬のまえに現れたであろう。山中恒の原作は読んでいないが、映画のストーリーはメロドラマもいとこながら、出てくる場所ごとのシーンの美しさは格別で、山中の小樽への「ノスタルジイ」がつかがい知れる。

過去からの解放

岩井俊二監督の秀作「LOVE LETTER」も小樽を舞台にした一種の幽霊映画である。

神戸の娘渡辺博子は恋人を山で亡くすが、あきらめきれない。恋人は小樽出身の藤井樹ついでという青年で、その中学時代の写真が出てきたので、なんとなくそこにある住所宛に手紙を出したら、死んだはずの恋人の名前で返事が返ってきたではないか。とまどいながらやりとりがつづき、博子は小樽へ幻の恋人の正体を確かめに行こうと決心し実行する。この謎は、その中学の同じクラスに藤井樹という同姓同名の男女がいて、返事をくれたのは女性の方だったということ、あつさ



『LOVE LETTER』劇場用ポスター

り解決する。

しかし、博子は以前から気になっていたもうひとつの謎——彼がほんとうに自分を愛していたのか、ほかの誰かの代わりを務めているのではないかという——がよみがえるのを感じる。樹とのあらたな手紙のやりとりで彼の中学時代を深く知るうちに、次第に愛の真相があぶりだされてくる——。最初の「霊界」との交信は誤解にもとづくものであったが、それが生んだ次の交信は亡き恋人の心の秘密に入りこむ旅、つまりは自己の再生の旅のはじまりでもあった。

澤井信一郎の「恋人たちの時刻」をみることはできなかったが、その原作（寺久保友哉）は読んだ。札幌の医大予備校生が一目ぼれした

女性村上マリ子から、高校時代の行方不明になった親友を探してほしいと頼まれ、小樽に行く。なかなか見つからない「幻の女」はじつは彼女のかつての姿だった――。

これら「小樽映画」が共通して小樽に託すイメージとはどういうものだったか。

「はるか」の綾瀬は忘れたい過去を固く封印したまま小樽に帰ってきたのだが、それに応じて現れたかのような幽霊は、過去の落とし児でありながら未来を象るはかみせることで、そろそろ封印を解く頃合いだと告げる役を演じる。「LOVE LETTER」の博子は逆に過去にこだわり続け、その延長線上で小樽に向ったのだが、そこで過去の真実を知り、こだわりから解放されるきっかけを掴むことになる。「恋人たち」のマリ子も過去へのこだわりから、忘れたい過去を恋人に掘り起こさせるといふ手の込んだことをする。つまりは過去から手を切りたいのだ。それぞれに重い過去があつて、それぞれにこだわりがあり、それからの解放が潜在的な願いとしてはある。それを仲立ちしてくれるのが幽霊であつたり、小樽という土地であつたりするのだと、映画作家たちは告げたがつてに私にはみえる。

故郷からの卒業

話を「幽鬼の街」にもどすならば、伊藤整もまた――と私は思う――「幽鬼の街」とその続編「幽鬼の村」を書き上げることで自己の過去とジョイスへの二重のこだわりから解放されたのではないか。徹底的

に自己をあばぎ、ジョイスをなぞることによってこそ《卒業》が可能になるという方法がとられたのであり、それをインシエクションとして伊藤は、以後ジョイスばりの「新心理主義」から離れた独自の作風を打ち立てることになった。あたらしい出発点に立とうというとき、人は多く原郷に戻る。伊藤がおこなったのもそれであつた。

伊藤整はその二十年近く後の一九五六年に自伝的な長編『若い詩人の肖像』を二年がかりで書き上げ、成熟した眼でとらえた、しかし十分なままましい小樽時代の過去を描き出した。そこには《卒業》した作家にふさわしい、みごとなまでの自己凝視の一つの達成を読みとることができるよう思う。

それについてジョイスは最後までダブリンから卒業し切れなかった――いや卒業を拒否したのではないか。一九一四年の『ダブリンの市民』から一九三九年の『FINE GANZ・ウエイク』にいたる主要四作品はすべてダブリンを舞台にしている。ダブリンは、汚らしい小説を書いて自分を捨てた彼を嫌い、彼はそのダブリンの偽善と偏狭を憎んだ。しかし、憎みつぱなしであれば、こうは書き続けられるものではない。彼はよく「なつかしの薄汚れたダブリン」と言つたらしく、この言葉は『ダブリンの市民』（「小さな雲」）にも出てくるのだが、これこそ彼のホームタウンへの愛憎交々のメッセージではなかったか。もしかしたらジョイスはどこかで、ボヴァリー夫人ならぬ「ダブリンはわたしたち」とつぶやいていたかもしれない。

〔蛇足〕

ダブリンと小樽に実際にある文学館の話をした。

ダブリンにはいくつかの文学館機能をもつ施設があるが、規模と質でまず指を折るべきはダブリン作家博物館であろう。しかし、これはずいぶんおそく一九九一年にスタートした。ジェイムズ・ジョイス・センターは一九九二年に発足、バーナード・ショーの生家の開放も一九九三年と、いずれもがダブリンの経済振興をねらい、観光客の増加を当て込んだもので、作家博物館を立ち上げたのは市の観光局である。

アイルランド人には文学者を顕彰しようといった感覚はあまりないのかもしれない。いや、ジョイスは特別だったのか。彼は一九四一年チューリッヒで亡くなったが、イギリス領事は葬儀に出席しスピーチもしたのに、アイルランド領事は出席しなかった。その二年前南仏で客死したエイツにたいしては、戦後一九四八年に遺体をスライゴウの教会墓地に納めるためアイルランドの軍艦が差し向けられるという最高の敬意が払われたというのに、ジョイスにはそれはなかった。偉大な詩人を通ずると同じあつかいを偉大な散文作家にもという遺族らの運動は功を奏さなかった。わいせつで尊大というジョイスへの敵意は死後も長く残った。猥褻裁判がジョイスの勝利に終わってからも、アイルランドの税関は彼の作品を根気よく差し押さえ続けた。一九八二年になってはじめてアイルランド大統領は和解宣言を行なって、彼をアイルランド人作家と認知する。九〇年代に入るとジョイスは十ポンド紙幣の顔になった。ダブリンの繁華街に彼の銅像が立つようにな

ったのもその頃だ。ブルームの足跡にブランクがはめこまれるようにもなる。彼の名声に商業価値を認めざるを得なくなったのである。

それに比べると小樽の市立文学館の発足は一九七八年と、ずいぶん早かった。市立としては全国初の文学館だったらしく、北海道立文学館と比べても一〇年早い。創設が早かっただけでなく、活動振りがめ



市立小樽文学館

ざましい。とくに企画展が充実し、そのさいの刊行物もなかなかの出
来である。伊藤整についても何冊かのパンフレットが出されている。
HPも読ませるし、関連施設とのリンクもはかられている。商工会議
所HPの「小樽商人の軌跡」などからは、小樽文学を知るうえで欠
かせない知識が得られよう。文学講座、文学散歩もよく考えられてい
て、本文でとりあげた「幽鬼の街」の散歩前の館長亀井秀雄の講義など、
教えられるところが多かった。

小樽市の予算は知れているはずだが、工夫を凝らしてコレクション
の充実にもつとめている。『小樽文学舎』という市民団体をうまく使っ
て、小林多喜二の重要な書簡などの入手に成功したり、韓国の大学校
との交流を進めたりしている。

じつは「ミニ文学館都市」と書いたとき、この実在の文学館のこと
が念頭にあった。亀井と玉川馨という副館長のコンビの活躍は、本シ
リーズ第三回の「いい都市にはいい〈学芸員〉がいる」という命題のよ
き例証である。またジュネーヴの回で描いた「発信型博物館都市」を
地で行くものでもあるだろう。

伊藤は没後一年足らずの一九七〇年に友人たちの手で文学碑を建て
られているし（生前すでに建立が決まっていた）、一九九〇年には小樽
市によって伊藤整文学賞が設けられた。没後四一年ではじめて、それ
もたぶん名声の利用のために和解の手を差し伸べられたジョイスに
比べ、はるかに暖かく故郷に迎えられたかにみえる。

使った資料のなかから、若い研究者の手になるあまり知られていな
い新しい仕事だけを挙げておきたい。「死者たち」のラスト、フュアリー
の幽霊の読みについては小島基洋「妻の恋人あるいは空虚のヴィジョ
ン—Joyceのthe Deadを読む」（『エール』第26号、2006年11月）に、
よくここまでと、おどろき、しかし説得された。

ジョイスと伊藤整の接点についてはまだわからぬことが多いが、最
近の菊地利奈の仕事が注目される。「伊藤整と左川ちか：アイルラン
ド文学にみいだした『希望』（アイルランド研究年次大会、2007年
報告）はその新鮮な一歩である。

八回にわたって連載した「博物館都市巡り」は改稿のうえ『都市は〈博
物館〉——ヨーロッパ・九つの街の物語』として九月に岩波書店から刊行
されます。この連載は今後もつづきたいので、引きつづきご愛読ください。